

第17部会

学校現場では常に個人指導と集団指導の両方が求められる。

その際の留意点についても「へわれーなんじ」へわれーそれの二つの根源語の観点から述べたい。個人指導をする場合に教師がわきまえていなければならぬことは、子どもたちとの間に「へわれーなんじ」の関係をつくろうとすることである。なぜならば目前の子ども一人ひとりとは絶対的な存在、つまり、「唯一無比の存在である」からである。集団指導をする上でわきまえていなければならぬことは、「規則や道義的な価値」を前面に出すことである。つまり、「へわれーそれ」の関係になる必要があるということである。なぜならば、これなくして社会秩序は保たれないことを考えれば、学校という小さな社会にあつてもこのことは大切なことである。このことは公共性をもった個を育てる契機にもなることである。

ブーバーは、「世界は人間のとる二つの態度によつて二つとなる」という。このことは、教育の現場にあつては「へわれーなんじ」へわれーそれの世界に分けるのは主に教師側であることを意味する。双方の世界があることの重要性を考えると、教師（養護教諭）は日常の教育活動の中でどちらの世界で目前の子どもたちと接しようとしているのか、ということを常に認識して自分の言動に細心の注意をはらつていかなければならぬ。

近代日本における「宗教的情操」教育

——教育論争史からの一考察——

齋藤 知明

「宗教的情操」の概念は、戦後の教育政策においても、戦前の概念を継承している。それゆえ、現代の「宗教的情操」を考へるにあたり、戦前の日本における「宗教的情操」がどのように生まれ、語られたのかを検討することは重要である。そこで、近代日本において「宗教的情操」の概念が形成されていく過程を考察するために、教育論争でどのように宗教が語られたのか、特に明治三十二年の訓令一二号発布前後の道徳教育論争に焦点を当てる。本論争は、いかに宗教を普遍化・倫理化して学校教育における道徳教育に用いることができるか、ということが主に論じられた。ここでは、本論争を、「宗教的情操」の概念が論じられるひとつの契機として考える。

「情操」ということばは、明治二〇年代には「情緒よりも高次で、道徳や宗教に関わる感情」として、主に教育学・倫理学の用語として、それ自体に価値を含むものとして使用されていた。「宗教的情操」は、明治二〇年代以降に使われた言葉であるが、当初より、通宗教・宗派的な色彩が強く、また、理想的・倫理的価値が組み込まれ、心をより良い方向に持つていくという目的が付されていたのである。

「宗教的情操」ということばが、正式に政策として発表され

たのは、昭和一〇年の「宗教的情操ノ涵養ニ関スル」文部次官通牒であった。しかし、政策や審議の経過を見ていくと、明治末期から、学校教育において「宗教的情操」の涵養に期待する議論がなされていた。大正自由教育など新たに教育を研究・実践する大正期の風潮や、国民道徳の見直しや徹底が議論されるなどの要因も含んで、昭和期にはすでにさまざまな教育関連の大会・会議で「宗教的情操涵養」に関する決議が起こっていた。そのようななかで、昭和一〇年の文部次官通牒にいたったのである。以上のように、昭和一〇年の文部次官通牒は「宗教的情操」の始まりではなく、長い間議論された末の結論として扱うべきであると考ええる。そこで、「宗教的情操」の系譜を明治三〇年代の道徳教育論争に求めてみたい。

この論争は、井上哲次郎が「倫理的宗教」を主張したことから始まる。「倫理的宗教」とは、宗教の歴史性・特殊性を排除し、合理的に時代に適した普遍的・理想的であり、倫理に特化した宗教のことである。これを道徳教育に用いればよいのではないかと、井上は主張した。これに対して、様々な分野の知識人が反論した。大西祝は、宗教を教えないまでも、「宗教的な世界観」を持つ道徳教育は必要であると論じ、宗教の道徳教育の有効性を主張した。鈴木大拙は、道徳教育で「宗教的思想」を教えることを積極的に肯定した。村上専精は、人類の歴史上、道徳教育を宗教が担ってきたという事実を踏まえた上で、宗教が論じてきた「真理」は教育と対立するものではなく、道徳教育に対して有効であることを論じた。元良勇次郎は、「神秘的なるもの」が必要であるとし、心理学の視点から国民道徳

の形成には宗教が必要であることを述べた。加藤玄智は、世界的・普遍的な視点で宗教を扱う宗教学を教育者が勉強し、子どもには「真の宗教」を教えるべきであるとした。

各知識人とも道徳教育において、そのままの宗教が必要と論じるのではなく、「宗教的な世界観」「宗教的思想」「真理」「神秘的なもの」「真の宗教」というような、歴史性・特殊性を捨象した、宗教の普遍性・倫理性を説いていた。本論争は「宗教的情操」が共通の土台であったとみることができるといえる。このように、当時西洋から輸入して発展していったさまざまな学知やキリスト教の影響によって、「宗教」は普遍化・倫理化され、新たな価値が見出されたと言ってもよいだろう。その新たな価値が、道徳の問題を解決するための、普遍性・倫理性を持った宗教的なものであった。

宗教文化教育と宗教情操教育の相違点

井上 順 孝

広義の「宗教教育」のうち、公立学校において可能なタイプの教育の一つとして、宗教文化教育が提起されている。宗教文化教育は、これまで公立学校における宗教教育をめぐる生じた対立を乗り越えることが可能と考えている。公立学校における宗教教育は、とくに宗教情操教育というカテゴリーをめぐる大きな議論を呼んできた。そこで宗教情操教育をめぐる議論